

「北方教育社」同人，佐藤忠三郎の学級経営の
実践について

志 村 廣 明

**Chuzaburo Sato's Classroom Management :
A Historical Study of His Educational Practice**

Hiroaki Shimura

Summary

The main purpose of this article is to clarify the classroom management proposed and practiced by Chuzaburo Sato, who played a pivotal role in the “Hoppe Kyoiku Sha”, the voluntary group of teachers in the Tohoku district of Japan during the 1930's.

The net product achieved through his classroom management was the creation of educational atmosphere based upon the cooperation and self-government in the classroom.

Received April 30, 1987

Keywords: Chuzaburo Sato, Hoppe Kyoiku Sha, History of Classroom Management

は じ め に

筆者は、ここ数年来、明治以降における学級経営の歴史をテーマに取り上げ、研究を進めている。その一環として、秋田の「北方教育社」同人、佐藤忠三郎、加藤周四郎、鈴木正之等の学級経営の実践を研究対象に据え、彼等の学級経営関係の資料を収集してきた。本稿は、そのうちとくに、佐藤忠三郎を取り上げ、彼の学級経営関係の資料の整理と重要な資料の収録を主な目的とするものである。

「北方教育社」は、1929（昭和4）年6月、秋田の成田忠久によって創設された綴方教育の普及と研究をめざす団体であり、そこでは月刊の児童文集『くさかご』（同年7月創刊、のちの『北方文選』）および綴方教育研究誌『北方教育』（1930年2月創刊）の刊行等の事業が行なわれた。同社の結成を契機として、秋田県において生活綴方運動が高揚したが、それはちょうど全国的に経済不況の嵐がふきあれる時期であった。東北地方においては、経済不況とともに霜害、冷害等の自然災害による農作物に対する被害も甚大で、農村部の窮乏にははかりしれないものがあつた。そのため、秋田県でも、小作争議、教員俸給の減額・遅配・不払いが相次ぎ、さらに、欠食児童や少女の身売りの問題が深刻な

社会問題となっていた⁽¹⁾。

この時期、「北方教育社」に結集し、生活綴方運動の普及とその研究に力を尽くした教師に、先にあげた佐藤忠三郎、加藤周四郎、鈴木正之のほか、佐々木昂(太一郎)、松井栄二等がいた。彼等は、やがて、山形県の国分一太郎・村山俊太郎、宮城県の鈴木道太・佐々木正、福島県の木下龍二等との交流を深め、1934(昭和9)年11月、北日本国語教育連盟を結成した。これにより、秋田県の生活綴方運動が、東北一円の運動として発展していったのである。なお、この東北一円の生活綴方運動を称して、「北方性教育運動」という。

「北方性教育運動」を担った教師の学級経営の理論と実践に関する研究としては、戸田金一「学級経営の創造⁽²⁾」(戸田金一『秋田県教育史、北方教育編』第8章所収、1979年9月)、碓井岑夫「社会に開かれた学級文化活動——村山俊太郎の理論にそくして——」(『特別活動研究』第156号所収、昭和50年10月1日)、海老原治善「村山俊太郎の学級経営の理論と実践⁽³⁾」(海老原治善『現代日本教育実践史』第7章所収、1980年10月)および中野光『石橋勝治著作集第2巻 生活と自治の学級経営——戦前・戦中編——』の解説(1984年8月)があげられる。しかし、これらのなかには、佐藤忠三郎については言及されていない。

I. 佐藤忠三郎の学級経営の実践

1. 佐藤忠三郎の経歴

佐藤忠三郎は、1909(明治42)年12月5日、秋田県由利郡矢島町の呉服商の長男として生まれた。矢島尋常高等小学校を卒業後、1925(大正14)年4月に秋田県師範学校本科第一部へ入学した。1930年3月に同校を卒業し、4月から母校の矢島尋常高等小学校へ赴任した。そして、同時に「北方教育社」の同人となり、生活綴方運動に加わった。その後、北秋田郡鷹巣尋常高等小学校(1933年～1934年)、由利郡松ヶ崎尋常高等小学校(1934年～1939年)、本荘女子尋常高等小学校(1939年～1940年)を経て、1940(昭和15)年4月に由利郡川内尋常高等小学校へ転勤したが、その年の11月に治安維持法容疑で検挙され、1943年4月の秋田地方裁判所において、有罪判決を受け退職した。敗戦後、教職に復帰し、由利郡の矢島国民学校(1946年～1947年)、矢島中学校(1947年～1958年、その間1951年に教頭となる。)を経て、1958(昭和33)年4月、川内小学校長となった。そして、1963(昭和38)年4月、本荘市立小友中学校長となり、1968年3月同校を定年により退職した⁽⁴⁾。

2. 佐藤忠三郎の学級経営の実践

佐藤忠三郎は、1930(昭和5)年4月、母校の由利郡矢島尋常高等小学校へ赴任し、まず、男女混合編成の尋常科3年の担任となり、学級文集『やまゆり』第1号(同年9月)、第2号(翌年1月)を発売した。そして、1931(昭和6)年度と1932(昭和7)年度には、尋常科4年(男子組)と尋常科5年(男子組)を受け持ち、月刊の『学級タイムス』を発売するとともに、クラスの者が助け合う「協力学習」等を実施した。1933年4月に赴任した北秋田郡鷹巣尋常高等小学校では、尋常科1年の担任となり、学級文集『カタツムリ』第1号、第2号を発売した。さらに、1934年4月に由利郡へもどり、

松ヶ崎尋常高等小学校の教師となった⁽⁵⁾。以下では、同校における1935(昭和10)年度を中心とした佐藤の学級経営の実践に焦点をおき、(1)子どもの「生活台」と佐藤学級の理想像、(2)学級の自治組織、(3)学級文化の創造、(4)佐藤学級に対する子どもの印象の諸点から、その実態を明らかにする。

(1). 子どもの「生活台」と佐藤学級の理想像

1935(昭和10)年度に佐藤が受け持った学級は、男女混合の高等科1年36人(男子23人、女子13人)の学級であった。この子どもたちをとりまく地域社会の状況について、佐藤は、「生活勉強としての綴方教育実践」(1935年10月)のなかで、次のように述べている⁽⁶⁾。

子供らと僕との生活の場である村は日本海に面し、長汀十一軒砂浜にして繫船の地の利無く、漁獲物も少ないが十二月鱒漁の時には、本当に漁村らしい喜びに満たされる。更に丘陵海に迫り殆ど平野なく、此の丘陵を縫ふて走る小川の流域に僅かに開けてある。平均一戸当田地四段五畝歩、畑地二段七畝。此の統計の上に立っての素朴なる観察に基づいて、村の経済機構を云々することは許されないかも知れないが、農業は大部分老人と女子に委ねられてある。そして村の若者たちは此の経済生活打開のために、カムチャッカ、樺太、北海道方面に毎年四百人以上も出稼に行っている。出稼は村にとって大事な生活資源である。……

これによると、当時、松ヶ崎の村では、漁業と農業が主な産業であったが、漁業はふるわず、村の若者の多くがカムチャッカ、樺太、北海道方面へ出稼⁽⁷⁾に行き、残った老人と女子が農業に携っているという状況であった。

佐藤は、こうした「生活台」に子どもとともに生き、「この子供らを僕は深く考へる意識を持つ生活の眼の持主たらしめ、更に執拗に現実にしがみつぎ、どこまでもどんな生活をも切開いて行く生活意欲に満ちた子供として送り出⁽⁸⁾」すことをめざし、文化勉強(各教科の学習)とともに、綴方による生活勉強に力を尽くした。

佐藤学級における理想的な「級の生活」とは、次に示すとおりであった⁽⁹⁾。

先づ腹の底からの学級人となれ。学級が悪く言はれたら心から腹を立て、ほめられたら何事にも増して喜べる人間となる事が学級人としての第一歩だ。次に学級は二十七人⁽¹⁰⁾がバラバラに集っているのではない。皆で一つの世の中を作っているのだ。そして各々が仕事を分担して住みよい、気持よい世の中を作りあげる事をいつも考へろ。こゝでは、協働を乱すブチコハンとマゼツカヘシとアキラメとナゲヤリと無責任が一番悪い事をよく頭にたたきこめ。

これからわかるように、佐藤は、協働精神によって、協力と連帯を中心とする理想的な学級の創造をめざしたのであった。

なお、佐藤学級では、学級の「生活信条」として、次の6項目があげられていた⁽¹¹⁾。

- (一) 頑丈な心と身体を作らう。
- (二) 皆が協働してよい生活を組立てよう。

- (三) 仕事をしっかりと覚え、働くことを喜ぼう。
- (四) よく生活を観察し、反省し、よい考を生み出さう。
- (五) 仕事を熱と力と頭でやりとげよう。
- (六) どんな生活にも生きぬく元気を持たう。

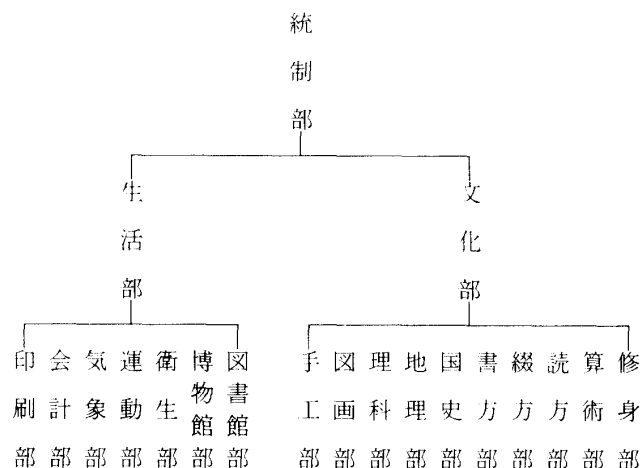
(2). 学級の自治組織

佐藤学級では、教師が子どもに直接命令を下したり、教師が任命した級長をとおして教師の命令を伝達させるというやり方ではなく、できる限り子どもたち自身の手で学級を運営させることに主眼が置かれ、クラスのメンバー全員が、「文化部」に一つと「生活部」に一つ所属し、学級の自治活動に参加した。「文化部」としては、「修身部」をはじめ各教科ごとに部が設けられていたが、それは、「勉強の機関車・級の各科のリーダー」としての役割を果たすものであり、「新しい勉強法を知らせる」こと、「問題を集める」こと、「材料・参考資料を集める」こと、「作品を掲示する」こと等において学級の文化勉強をリードしたのである⁽¹²⁾。

「生活部」としては、「本の保管・貸出・調査」を行なう「図書館部」、「植物、昆虫、採集・整理・標本製作・記録・保存」に携わる「博物館部」、「毎月体重検査・火曜検査・看護」を担当する「衛生部」、「土曜野球・対組試合・記録会」にかかわる「運動部」、「温度・天気・気圧」について研究や記録を行なう「気象部」、「学用品共同購入・集金・貯金」を担当する「会計部」、「生活新聞・文集・記録・プログラム」の印刷を行なう「印刷部」が置かれた⁽¹³⁾。

学級の審議機関としては、「相談会」が置かれており、毎月1日と15日に開かれた。そして、「文化部」と「生活部」の上に「統制部」が設けられ、そこには、公選のリーダーがいた。

佐藤の「生活勉強としての綴方教育実践」(1935年10月)に掲げられた学級内の自治組織の図を示すと、次のとおりである⁽¹⁴⁾。



また、佐藤学級では、夏休みや冬休みにおいて、部落を単位として、「友だちが一しょになって遊んだり勉強を教へ合ったり⁽¹⁵⁾」する校外における「クラブ」が設けられた。その「クラブ」の活動状況を見るために、次に子どもの綴方を示しておこう⁽¹⁶⁾。

夏休クラブ・・・松ヶ崎・・・ 兵太郎

クラブの場所はいつも八幡様でやりました。やった日は四日、八日、十四日、十九日、二十三日やりました。……

僕たちは初、行くと必らず、神を拝してそれから勉強に取りかゝった。僕たちはいつも市郎君によって行った。市郎君に行くと、いつも「よう行かう」と言ふのだった。

五回の中、二回は神沢クラブの人たちも来て色々相談して家に帰った事もあった。十四日の日も相変わらずやっていると亀田の倉庫の人が八幡様に来て「なんと松ヶ崎の子頭良いといふのはこんな所に来て勉強してゐるもの頭良くなるのもまだまだ」と言った。その人が拜んで行ってから僕たちも少し居て帰ったら時計は十一時五十五分であった。クラブ五回やった中、うまく行ったかを見るとよく行ったが人が集らなかったことがクラブに来た人が皆残念がった。

二十三日のクラブの時に僕が一番先に「先生から手紙来た」と言ふと市郎君は「おらにまだ来ね」と言つてゐた。嘉吉に来た手紙によれば二十五日の午後三時にくると書いてあったことを聞いて皆で迎へに行くやうにさうだんしたりしてみた。僕は又冬休のやうに先生が来なかったらとも思った事があった。〈一〇・八・二七〉

この綴方から知られるように、松ヶ崎クラブの子どもたちは、夏休み中に5回にわたり、八幡様に集まって、力を合わせて勉強や遊びに取り組み、教室を離れて自分たちの「自治協働的な生活⁽¹⁷⁾」をつくりだしたのである。

(3). 学級文化の創造

佐藤学級では、学級の「文集」や「生活新聞」の発刊、「子供図書館」の設置、佐藤の下宿で「生活の話・星座研究・月の観察・読書⁽¹⁸⁾」を随時行なう「夜の会」の開催、子ども同士の交流をはかるための「土曜野球」の開催等に代表されるように、学級のなかに「文化」を創造する学級文化活動が行なわれたが、それは、子どもの自治活動と密接な関係にあった。

①. 学級の「文集」の発刊

佐藤は、松ヶ崎尋常高等小学校へ赴任して以来、『浜の子』の第1号（1935年1月、尋6）、第2号（1935年5月、高1）、第3号（1935年7月、高1）、第4号（1936年4月、高2）、第5号（1936年9月、高2）を発刊したが、これらの「文集」には、子どもによって創造された文化財である綴方が多く収められていた。

佐藤によると、「文集」は、「生活のしかたを吟味して行くために、研究しなければならぬ文を集めたものであり、「生活読本」としての役割を果たすものであった。学級でのその活用のしかたとしては、「綴方の「文の研究」の時に持って来て、感想を発表し、生活のしかたを吟味する。」というやりかたであった⁽¹⁹⁾。したがって、「文集」は、「表紙がボロボロになるまで読む」べきもので、それが、「生活前進」のために充分活用されることが望ましいと考えられた⁽²⁰⁾。

このように、子どもの創造する文化財である綴方が教材となり、それが子どもたちによって吟味されたが、その過程において、子ども同士の心の交流がはかられた点が注目される。

②. 「生活新聞」の発刊

佐藤は、「生活勉強としての綴方教育実践」(1935年10月)のなかで、「生活新聞」について、次のように述べている⁽²¹⁾。

- イ. 毎月曜毎に印刷, 配布……西洋紙一枚両面にする。
- ロ. 編集は児童を男六班, 女三班(一班四名)に分けて担当させ, 印刷は印刷でやる。
- ハ. 記事は級・学校・村の生活報告・国の出来事・行事・毎月の生活暦・学習参考・ローマ字勉強・漫画・友だちだより・夏休・冬休生活だより・生活モットー・集会プログラム等である。(以下略)

これによると、その発刊は毎月曜日となっており、編集は子どもたち自身の手によってなされると記されている。

1935(昭和10)年度に実際に発刊された「生活新聞」の数は、34あった。それらが発刊された年月日と号数を表にして示すと、次のとおりである⁽²²⁾。

1935(昭和10)年度「生活新聞」

号数	発刊年月日	号数	発刊年月日	号数	発刊年月日	号数	発刊年月日
1	昭和10年4月10日	10	昭和10年6月4日	19	昭和10年7月29日	28	昭和10年10月2日
2	〃 4月17日	11	〃 6月4日	20	〃 7月29日	29	〃 10月8日
3	〃 4月22日	13 ^(マフ)	〃 6月10日	21	〃 7月30日	30	〃 11月20日
4	〃 5月1日	13	〃 6月10日	22	〃 7月31日	31	〃 11月28日
5	〃 5月8日	14	〃 6月10日	23	〃 8月9日	32	〃 12月7日
6	〃 5月13日	15	〃 6月22日	24	〃 8月	33	昭和11年1月1日
7	〃 5月18日	16	〃 7月1日	25	〃 8月29日	34	〃 3月7日
8	〃 5月25日	17	〃 7月8日	26	〃 9月9日		
9	〃 6月1日	18	〃 7月15日	27	〃 9月13日		

「生活新聞」に対するクラスの子どもの印象は、比較的良いが、次に、クラスの市郎が「生活新聞」に対する感想を記した綴方を紹介しておこう⁽²³⁾。

生活新聞は読むと面白く又物事や世の中の出来事がわかってよい。僕は一学期からのをとちてあって時々暇な時、広げて見ると、あの時こんな事があった。あの時の野球は勝っておった。負けであった。其の時々の行事等がわかるのでとても面白い。

始の中はどんな事を書いたらよいかわからなかったので、大抵新聞記事であったが、新聞の書方・材料の拾ひ方がだんだん分って来ると文も面白くなり、色々の事が分って大変面白い。又勉強の時の参考になるやうな事も書いてあり殊に国勢調査の結果、村の人口等が書いてあったので冬休帖の勉強の時役立った。

一番面白い新聞は祭の時各組で書いた祭に関係した色々の事を書いた新聞であった。一番よく書い

たのは中程の一学期の終頃、二学期の初であったが、だんだん新聞の出す日数が少なくなり、三学期になると時々しか出さなくなった。僕は又もとのやうに自分たちで材料を拾ひ自分たちで謄写するのが良いと思ふ。そして前のやうに一週間毎でなくとも、二週間毎でもよいから、其の時々の中の様子、自分でみつけた話などを新聞で知らせるやうにしたい。

三学期は最後の勉強で先生も僕達も忙しかったため、新聞は少しか出されなかったが高等科二年になったら、又もとのやうに出すやうにしよう。

③. 「子供図書館」の設置

佐藤学級に設けられた「子供図書館」について、「生活勉強としての綴方教育実践」(1935年10月)のなかで、次のように記されている⁽²⁴⁾。

- ・同じ年位の子供の書いた文を読んで、生活の眼を深めることも大切であるし、読書に恵まれない子供らに文化的栄養を与へてやることは大切な教育的仕事と思ひ、僅かばかりであるが、集めた文集と本を集めて読ませてゐる。〈文集二四・綴方倶楽部二〇・赤い鳥四四、其の他雑誌類二五同書籍類五〇〉
- ・子供の自治にまかせ、図書館係が保管・貸出をする。

これによると、この「子供図書館」を設けたねらいは、同じような年齢の子どもの書いた文集を読ませ、「生活の眼」を深めさせるとともに、「読書に恵まれない子供らに文化的栄養を与へる」ことにあった。そして、この図書館の運営は、子ども自身の手により自治的に行なわれたのであった。

(4). 佐藤学級に対する子どもの印象

佐藤は、『浜の子』第4号(1936年4月発刊)のなかで、1935(昭和10)年度の高等科1年の自分のクラスの子どもたちに対し、クラスの印象について尋ねた結果を掲載している。これによると、男子13人と女子2人が、クラスの良い所を、そして男子13人と女子4人がクラスの悪い所を指摘している。そして、これに対し、佐藤がコメントを加えている。

クラスに対する子どもたちの印象と佐藤のコメントについて、表にして示すと、次のとおりである⁽²⁵⁾。

高一教室批判(良い所・悪い所)

	良	い	所
金 蔵	一、板の間をふく。二、生活新聞はおもしろい。		
利 夫	学校のうちで僕たちの学級は、いちばんものをかざったり、はくぶつくわんやめづらしいものであったらすぐ教室へかざっておく。ほかの級とちがって紙こくばんやいたこくばんがたくさんある。ほかの級なら毎日の日程もやらないが僕たちではやってゐる。		
市 郎	良い所は朝学校へ来て教室へ入ると先づ皆がおはやうをしあふ事だ、朝の気持の良い時にお早やうを言ふと、学校へ来たといふ気持が起り、気持よく感ぜられる。又組々の人が互に教へ合ふ事である。組の人が互に教へ合ふ事である。組の人が互に、にくみ合ふといふ事がなく、又自分の級の人には、どんな事でも言ひ合つて互に心持をわかり合ふ事である。こんな事は言はれない、こんな事を言ふと		

	自分が人におかしく思はれる等といふ事がなく思切つて皆で話合ふので誰も気持よく話をする事ができる。又クラブの時のやうに皆が集る時等自分は行きたくないなどといふ事がなく、よろこんで皆が集るといふ事である。
林 蔵	私たちの級は外の級のやつてゐないこともやる。たとへば村におこつたことや又は朝日新聞についてきたおもしろいことや又学校におこつたいろんなことを書く生活新聞や又はクロッキーや又早い事ですが明治節の時こしらへた奉祝のがくや又その外いろんなものがある。此の間は前進めがよくなつたといつて先生にほめられるやうになつた。
正 一	学級のよい所は生活の話をしてくれるから、みんなのためになり、そうじをする時にも一かいか二かいぐらいふく。
権 之 助	級のよい所は生活新聞などいろいろな物があつて、それによつて勉強したり楽しんだり、生活に必要な事を知つたりする所はよい。又そうじする時、ゆかをふくのもよい。
兵 太 郎	僕が思ふには野球や木曜講話等があつて良いと思ひます。たゞ一週間をメモリとすごすのを一日一日おもしろくして一週間で過すによいから。
良 一	学級のよい所は自分たちのためになる生活のこゝろを中心としてやつた。そして勉強した。それから生活新聞や木曜講話のやうなものをこしらへて、べんきやうにおもしろみをつけてべんきやうした。
三 司	生活新聞は僕たちによくつくした。わからない時わすれた時に見るからよい。学級では文庫はよい僕らの友だちでした。高二にも持って行かう。野球はとてもよいと思つた。僕たちの勉強の力を増す野球はよい遊びだから高二でもやらう。
久 作	よい所は皆がなかよく遊んだり、ざつしを見合つたりする事、毎日ゆかをふく事
源 蔵	ほかの学級がまだなんにもしらない中に僕たちの級がやつてゐる。それを見るとほかの級の人もまねすると言つて行く僕たちの級はなんでも一番さきにやつてゐる。
金 之 助	僕が思ふには協働精神がよいと思ふ。それから元氣のよいところもよいと思ふ。
作 蔵	僕らの学級は外の学級とちがつて広く手をのばしてゐる。たゞ何時も勉強するのでなく、元氣をつける紙芝居や野球などをする。これから見ると外の級は何もしない。それから生活手帖のやうな生活を観察するのもある。それから教室の中に文庫をもうけてゐる。そして各部に分れてゐる。それから生活新聞のやうな生活発表のやうなのがある。
サカエ	私達の級にばかり生活新聞があつたり、又外の級にないものがあつたりしておもしろい。又生活手帖があつたりして外の級よりも勉強がよけいあるがおもしろい。
ミヤ	いざとなると一まとめになる所。

	悪	い	所
源 蔵	僕たちの級の人あまりらんぼうすぎる。ほかの級の人をなかしたり、自分ばかりよいと思つてゐる人もまだおる。それからなんでも自分が先生にほめられたいと思つて、なにか人が持つて来た物として、自分が持つて来たふりをしておる人もある。まだまだ僕たちの方の学級わしっかりよくなつておらないのです。 皆僕たちの級ほどよい級わないと思つておるが、まだ僕たちの級わ、しっかりよいとわ、いわれないのである。		
金 之 助	いたづらをすると、時間中にたつてあるくこと、ぎょうぎのいけない所		
市 郎	皆で一つの物事を長く、きんちょうして成しとげる心がたりない。 もう少しこうすれば人のめいわくにかゝる、こうすれば人の役に立つよい事だといふ事を考へて物事をするやうにしなければいけない。 人がよい事をしたりするとひやかしたり、人のけんくわ等をすゝめたりする事がなくなつたが時々ある。又全体として勉強の仕方がたりないやうだ。		
金 蔵	一、毎時間きばきばとおらない 二、大そうじの時、よけいだせいだやら人の級よりもおそくできる。		

利 夫	<p>文庫部の人は一ばん先には、きちんきちんとやったが今では文庫の箱は、きちんとせいとんされてゐない。</p> <p>机の上につぼやいろいろの石などがたくさんあがってあるところは級のわるい所である。又何かある時、急にせいとんしたり、図画や地図などをはったりしないで、いつだれがきてもいゝやうにせいとんしておくといふ。</p>
林 蔵	<p>高一の級は授業時間さはがしくて時々六年生の高橋先生にしかられることもある。私たちの教室は中にありますから、少しさはがしくしても、両方の教室にめいわくをかける。</p>
正 一	<p>みんながまとまって生活をしていない。まとまっている人もあるが、そうでない人もあります。</p>
兵 太郎	<p>あそびのかねがなってもあそばさないのが、いけないと思ひます。</p>
権 之 助	<p>あまり紙くづやいろいろな物がまざって物をたねるにもめんどろなやうになってゐる</p>
久 作	<p>勉強してゐる時、多く叱られる。先生の言ふこときかないこともある。</p>
三 司	<p>なんだか教室はきたないような気がした。こんどはきれいにしよう。</p>
良 一	<p>僕が思ふには、あまりしゆくだいをやらせないから、いやであれば勉強をしなかつた。又はじめにつくつたことをやめて、又べつあたらしいことをやってものをいくらもつくつたのはいけないと思ふ。</p>
作 蔵	<p>各部があるがこれらの部があまり活動しないこと。</p> <p>それから勉強中に声を上げたりするのもあまりよいことではないと思ふ。</p>
フ サ 子	<p>ざわざわしてゐるのは悪い所である。</p>
サ カ エ	<p>私たちの教室は一ばんにやかましい。時間中でもあそび時間のやうに、やかましい時があるから、来年はもっとひきしまつてしづかに勉強してゆきませう。</p>
ミ ヤ	<p>衛生を重んじない所例へば此の間はよほどよくなったが、御飯を食べた後、すぐ飛廻ったりする人が多い。</p>
ツ ル	<p>男の人はさわがしい時がある。それをなほしたら、どうでせう。</p> <p>それからだれかほめられたりすると、その人をしゃべ、何か少しでもよいことをすると、ばかにしてあそばない時もある。みんなおたがひにそんな事はすてゝみんなで、げんきよく正しい級をつくりませう。</p>

	批 判 の 批 判
佐 藤 忠 三 郎	<p>先づ第一番に感ずることは女の人達が級の善悪について書かない事はどうした事か。</p> <p>女の人達の教室での態度は近頃よくなって来た。まじめな態度とコツコツとやってゐる姿は大へんよいと思つてゐる。だがそれが先生に言ひたい事や学級についての言ひたい事をひた押しにおしかくして、たゞ表面だけの真面目さだったら物足りない。自分たちの言ひたいことやこうしてもらひたい要求やこうしたらどうかなどの相談は、何かの形で、ざっくばらんに打ちあけて、からりと晴れた気で、今のまじめさを続けてもらひたい。たゞ女はつゝしみぶかくあるものだといふ考から、言ひたい事も言へず又言はないで生活して行く事は、これからの女のとるべき生活態度ではないぞ。</p> <p>此度書かないのは、多分去年の秋に、騒しいと僕らの級が言はれてゐるといふ事から、先生が少し強い言葉で学級の人としてその事を何と聞かについて話したのを悪くとして、言はないに限ると思つて書かないのでは、あるまいか。臭い物にふたをしたとて、臭い物は決してよくなるまい。どこがいけない所かどうしたらよいかを考へて行く所に生活の進歩がある。</p> <p>僕たちはどんな事を言つてもよい仲間にならう。そして心に暗いかげを作らず、どこから見ても明るい心の持主でなければならぬ。</p> <p>皆の批判はまだ浅い。一番大事な点にふれてゐないのが多い。それに思切つてズバズバと言つてないのも多い。これは是非改めなければならぬ。心をもっと細かに打ちこんで考へ、言ふ時には自分の考へてゐる通りにあちこちに遠慮しないで言ふんだぞ。いゝか。</p> <p>善い点は更に中味をよくし、悪い所は皆で注意して早くなほさう。</p>

これによると、子どもが学級の良い所として評価しているのは、①「生活新聞」,「子供図書館」,「子供博物館」,「土曜野球」等の学級文化活動, ②子どもたちが毎日の生活を記録する「生活手帖⁽²⁶⁾」, ③佐藤が理想とする協働精神等であった。これに対し、子どもからみた学級の悪い所としては、乱暴、ひとりよがり、行儀が悪いこと、良い事をした子どもをひやかすこと、整頓が悪いこと、教室が汚ないこと、部の活動が不活発なこと、教室が騒がしいこと等、協働自治の精神に反する子どもたちの行動が指摘されている。

このような子どもたちの印象に対し、佐藤は、まず、クラスの女子が学級の印象について積極的に意見を発表しないことを批判し、女子に対しても、もっと率直に自分の考えを述べることを求めた。そして、子どもたちの意見の全体を読んだうえで、批判が浅いこと、ズバズバ言っていないことを指摘するとともに、良い所はさらに中味を良くし、悪い所は早く是正することを要求した。さらに、佐藤は、「僕たちはどんな事を言ってもよい仲間にならう。そして心に暗いかげを作らず、どこから見ても明るい心の持主でなければならぬ。」と述べ、何でも言える雰囲気のある明るい学級の創造を子どもたちに呼び掛けたのであった。

II 佐藤忠三郎の学級経営の実践と野村芳兵衛

以上述べた佐藤忠三郎の学級経営の実践は、池袋児童の村小学校⁽²⁷⁾（1924（大正13）年4月発足）における野村芳兵衛の「協働自治」を基盤とする学級経営をモデルとするものである。筆者は、1984（昭和59）年12月10日に資料調査のため秋田を訪れた。その際、佐藤忠三郎氏に直接お逢いし、当時のことをいろいろお聞きすることができた。お話によると、佐藤にとって野村はかけがえのない恩師であった。佐藤の学級経営の実践は、池袋児童の村小学校の野村の系譜をひくものであり、佐藤の学級経営の実践の根幹にあった協働精神は、野村の構想した「協働自治」論をよりどころとするものであった。佐藤は、矢島尋常高等小学校の教師時代から野村との交流を始め、上京して池袋児童の村小学校の参観を行なうとともに、来秋した野村から直接学んだ。なお、1933（昭和8）年に、佐藤は、野村から池袋児童の村小学校への転任を勧められたが、佐藤の都合⁽²⁸⁾で実現しなかったという。

さて、ここで佐藤の学級経営の実践のモデルとなった野村の学級経営について、野村の『生活訓練と道徳教育』（1932年1月）と『生活学校と学習統制』（1933年6月）をもとにみてみよう。

野村の学級経営につらぬかれた根本の思想は、「協働自治」論である。「協働自治」とは、「集団自治」であり、「協議」と「抗議」をとおして、集団の「組織的必要」（公利）と集団メンバーの興味（愛）とを対立させながら、これを「統制」する生活のことである。そして、この「統制生活」を貫く精神は、「連帯」と「友愛」の精神であったが、このことは、「学級人の喜びは、常に学級全体の喜びとならねばならぬ。⁽²⁹⁾」という野村の言葉に象徴的に示されている。

『生活学校と学習統制』によると、当時、池袋児童の村小学校では、1年生から6年生の全員をメンバーとして組織された7つの「家族」（＝「たてわり集団」）が設けられ、それぞれ、太陽の家族、月曜の家族、火曜の家族、水曜の家族、木曜の家族、金曜の家族、土曜の家族と名づけられた。そして、各々の家族では、年長の者が年少の者をいたわり、お父さん、お母さんとしての役割を果たして

いた⁽³⁰⁾。

また、各々の家族は、学校・学級において、自治活動の単位として重要な役割を果たしていた。たとえば、月曜日には、月曜の家族の者が主人役となって、食事のときにお茶を運ぶとか、学習面でもリードする役割を果たすとともに、各々の家族のメンバーは、「子供博物館」、「子供図書館」、「子供園」、「子供工場」、「集会部」、「運動部」、「家庭部」等の自治組織の仕事を分担した⁽³¹⁾。

なお、学校・学級の自治活動をリードするため、学校の代表者としての「村長」、「副村長」（各1名）、学級の代表者としての「区長」、「副区長」（各1名）および各部のリーダーである「部長」が置かれた。「村長」は、「学校相談会」の開催と「学校新聞」の発刊を、「区長」は「学級相談会」の開催と「教室新聞」の発刊を担当した⁽³²⁾。

次に、「子供図書館」を例にとり、子どもの自治活動の様子をみてみよう。この図書館の使命は、「毎日の教科書学習に於ける読書的方法に対して、参考資料を提供すること」、別に広く子供生活の一切に対して、読書の栄養を準備することの二つ⁽³³⁾であったが、当面は、毎日の教科書学習における参考資料としての役割を果たすことに主眼が置かれた。

この図書館の運営は、子どもたち自身の手によってなされる点に特色があった。その経営のしくみや委員の役割等について、次のように構想されていた⁽³⁴⁾。

- 1 子供図書館の委員は、学級児童の互選によって定め、委員中より一名の図書館長を選挙させる。
- 2 図書の整理方法は、書籍を甲種及び乙種の二種に分ち——甲種は比較的永久保存の目的をもつもの、乙種は雑誌類、又は破本など整理の困難なもの——甲種の書籍には、本の背に色紙を丸く打抜いたレッテルを貼って通番を打ち、毎金曜日に通番に従って本の整理をさせる。——整理方法を単純にしてをくことは、整理を確実にさせる上に甚だ必要なことである。
- 3 貸出し名簿を作って図書の貸出しをする。但し教科書学習の参考書は、貸出しをなさず。他の書籍も一日を原則とし長くも一週間以上に及ぶことを許さない。そして毎金曜日には全部返すことに規定してある。
- 4 子供達が家で本を買ってもらった時には、自分で読んだ後で、その本を持って来て、子供図書館に出し、皆の友達のために貸合ふやうにさせてある。
- 5 子供図書館の委員は、書籍を購入する場合には、原案を作って、学級相談会に提出し、協議の上でこれを購入してある。——書籍購入費は毎月の学用品共同購入費の中から支出する——
- 6 子供図書館の委員は、時々読書上の問題を相談会に提示して、いろいろの調査をしてもらっている。例へば、一番よく読まれる本の調査、一番おもしろい本の調査、子供図書館の経営方法に対する意見などがそれである。これからは時に読後感や、梗概記録なども募集して、「子供図書館の枝折」を発行させたいなどと考へてある。
- 7 発表会、夜の会、朗読会、劇の会、音楽会などの主催も、これを子供図書館の事業として、計画させるやうにしてある。
- 8 (省略)
- 9 (省略)

10 「動く図書館」——小さい車に木箱を載せて引いて歩く——を作って、自分達で森の方へ読書に行ったり、又時には、町の方や村の方へ、一般の子供達に読ませてやるために、「動く図書館」を計画することはおもしろい。子供達は、さうしたことで読書訓練と共に社会活動の自覚を持って行くであらう。

このような自治組織を基盤として、野村学級では、「学習活動」とともに、「学芸会」（「発表会」、「朗読会」、「音楽会」、「夜の会」、「ペーゼント」、「動植物観察」）の開催、「教室新聞」・「文集」の編集、「相談会」の開催、「遠足」・「旅行」、「遊びのプロジェクト（野球、サッカー等）」等の「倶楽部」活動が展開されたが、これらは、学級のなかに「文化」を創造する活動として重要な役割を果たしていた⁽³⁵⁾。なお、「倶楽部」活動は、夏休み中にも行なわれ、「子供倶楽部」がつくられて、「協働の仕事」が実施された⁽³⁶⁾。

次に、「文集の編輯」を例にとり、野村学級における学級文化活動の実態を示しておこう⁽³⁷⁾。

〔文集の編輯〕

- (イ) 子供達が発表会で発表した文の中で、合評が三重丸以上となった者は、必ず一定の原稿用紙(二つ穴が打抜いてあって、すぐ綴れるやうになってゐる)に清書して出す。
- (ロ) 文集係(子供博物館委員中から文集係が出る)は、集って来た原稿を一定の「原稿綴」に綴って子供博物館に保存^(ママ)ける。
- (ハ) 文集係は一ヶ月一回(又は一学期に一回)、傑作を集めて、謄写刷の文集を発行する。
- (ニ) 文集係には、編集部、原紙部、印刷部、製本部の四部がある。又特に原紙部で挿画係などを催^(ママ)ふ場合もある。何れもそれぞれの天分を持った子供が仕事を分担する。
- (ホ) 文集が発行されると、学級では合評会を開く。合評会の仕事は、次の通りである。
 - 校正——皆で誤字、脱字を校正する。
 - 質問——文意の通じないところを質問する。
 - 合評——始めに総評をする。評点は一つ丸から四つ丸まで。次に感想や批評を語る。

これによると、子どもが創造した文化財である綴方が、「文集」としてまとめられ、それが、クラスの子どもたちによって検討され、それをとおして子ども同士の心の交流がはかられたのであった。

ま と め

1930年代以降、従前の自由主義的な学級経営が衰退し、日本精神を中核とする国家主義的な学級経営が主流となった。この頃、学校・学級を道場として位置づける実践や軍隊をモデルとする学校・学級経営の実践を行なう学校もあらわれた⁽³⁸⁾が、これらの学校では、学校長→学級担任教師→児童という上意下達の命令系統が絶対的なものとされ、子どもたちの個性が無視され、命令に対して一律に服従する姿勢こそ大切であると考えられていた。

しかし、こうした学級経営が主流であった時代においても、教室内に沈潜して、野村芳兵衛の「協

働自治」の学級経営をモデルとし、学級を子どもの自治活動と文化創造の場として位置づけ、それらの活動をとおして、子どもたちの連帯意識を高めることをめざした佐藤忠三郎の学級経営の実践は、高く評価されねばならないと思われる。

佐藤学級では、「文化部」と「生活部」が設けられ、子どもたち自身によって自治的に学級の運営がなされ、その子どもの自治活動と結びついて、学級文化活動が展開されていたが、これらの自治と学級文化活動は、クラスの子どもによって積極的に受け入れられ、とくに学級文化活動が子どもたちから好評であった点が注目される。

なお、本稿では、佐藤忠三郎の学級経営の実践と野村芳兵衛の「協働自治」の学級経営との関係について充分考察できななかったが、この点については、今後明らかにしたいと思う。

資料収集にあたり、秋田大学の戸田金一教授と秋田県本荘市在住の佐藤忠三郎氏にはたいへんお世話になった。

注

- (1) 戸田金一『秋田県教育史、北方教育編』みしま書房 1979年9月1日 p. 250~p. 274, 川口良一『東北六県農村経済事情』秋田県耕地協会 昭和9年8月1日 秋田県の調査のp. 15~p. 19 (秋田大学附属図書館所蔵), 加藤恭蔵「農村不況と教師たち——昭和初頭の給料不払問題——」刊行年月日不詳 p. 1~p. 24 (秋田大学附属図書館所蔵)
- (2) ここでは、「北方教育社」同人、加藤周四郎の学級経営の実践について詳しく分析されている。
- (3) ここでは、村山俊太郎の学級経営の理論と実践とともに、石橋勝治の学級経営の実践について論及されている。
- (4) 戸田金一『秋田県教育史、北方教育編』みしま書房 1979年9月1日 p. 211~p. 212, 筆者が1984(昭和59)年12月10日に実施した佐藤忠三郎氏からの聞き取り調査
- (5) 前掲書 p. 211
- (6) 佐藤忠三郎「生活勉強としての綴方教育実践」1935年10月 p. 1 (佐藤忠三郎氏所蔵)
- (7) 1936(昭和11)年10月12日発行の「生活新聞」のなかで、佐藤学級の子どもたちが「出かせぎと農」という題で、出稼に対する考えを次のように述べている。(秋田大学附属図書館所蔵)

私達の方は一年中出かせぎ人は大体四〇〇人位あります。出かせぎすれば銭がたくさん入って良いが、農業も、もっと盛でなければならぬ。尾形先生の話によれば、田が年々外の村のものになって減じて行くとのこと。こまったことだと思ひます。人の話によれば今年、カムチャッカで今までになく人が死んだそうです。カムチャッカは主に、西海岸が良く東海岸が非常に悪かったそうです。私達の村の青年達(出かせぎ人)は皆といふわけでないが大てい出かせぎして帰ってくると、まつまひ行きしたものが世の中で一ばんえらい人のやうな顔をしていぼったり、いろいろわるいことをしたり、まだ兵たいけんさもしない中、たばこをふいたり、さけをのんだりします。お金も使ふやうになり百姓がいやになる。この村にとっては、困ったことです。出かせぎに行ったら、その業にはげみ、かへったら農も一生けんめいに、はげむやうな青年でなければならぬと思ふ。

これから明らかなように、佐藤学級の子どもたちは、危険をとまなうが金になる出稼の仕事に従事する村の青年のなかに、地元に戻っても農業を行わず、農業を嫌う者がいることを憂えていたのである。

- (8) 注(6)に同じ。
- (9) 佐藤忠三郎『浜の子』第4号 1936年4月22日 p. 28 (秋田大学附属図書館所蔵)
- (10) 1935(昭和10)年度の高等科1年の学級メンバーは36人であったが、翌年4月の高等科2年の学級のメンバーは9人減って27人となった。
- (11) 佐藤忠三郎『浜の子』第2号 1935年5月25日 (秋田大学附属図書館所蔵)
- (12), (13), (14) 前掲「生活勉強としての綴方教育実践」 p. 57
- (15) 前掲「生活勉強としての綴方教育実践」 p. 41

- (16) 前掲『浜の子』第4号 p. 42~p. 43
- (17) 前掲「生活勉強としての綴方教育実践」p. 42
- (18) 前掲「生活勉強としての綴方教育実践」p. 58
- (19) 前掲「生活勉強としての綴方教育実践」p. 52~p. 53
- (20) 佐藤忠三郎『浜の子』第1号 1935年1月5日 p. 138 (秋田大学附属図書館所蔵)
- (21) 前掲「生活勉強としての綴方教育実践」p. 51
- (22) 秋田大学附属図書館所蔵
- (23) 前掲『浜の子』第4号 p. 29
- (24) 前掲「生活勉強としての綴方教育実践」p. 56
- (25) 前掲『浜の子』第4号 p. 10~p. 27
- (26) 前掲「生活勉強としての綴方教育実践」(p. 46)のなかで、「生活手帖」について、次のような説明が記されている。
 (イ)西洋紙四分の一・四十頁の手帖である。そして早く書いた子供は更に新しい手帖を持つ。NOを追ふて行くのである。
 (ロ)此の手帖には何を書いてもいいのだ。日記でもなければスケッチ帖でもない。自由にのんきに書いていいのだ。そして子供と僕をつなぐ大事な楔だ。
 (ハ)月・水・金に僕が見る。そして此の中に書かれてあることから、子供の生活を知り、大事な生活問題を見つけ出して文に書くよう示唆を与へる。
- (27) 民間教育団体「教育の世紀社」(1923年8月創設)を母体として、58名の児童と、4名の専任教員(野口援太郎、志垣寛、野村芳兵衛、平田のぶ)、3名の専科教員および3名の研究生をもって、1924年4月に発足した小学校。(中野光『教育改革者の群像』国土社 1976年3月25日 p. 144~p. 145)
- (28) 佐藤は、長男であったため、地元を離れられなかった。(筆者が1984(昭和59)年12月10日に実施した佐藤忠三郎氏からの聞き取り調査)
- (29) 野村芳兵衛『生活訓練と道徳教育』厚生閣書店 昭和7年1月18日 p. 134
- (30) 野村芳兵衛『生活学校と学習統制』厚生閣書店 昭和8年6月17日 p. 155~p. 156
- (31) 前掲書 p. 273
- (32) 前掲書 p. 275
- (33) 前掲書 p. 260
- (34) 前掲書 p. 262~p. 264
- (35) 前掲書 p. 165~p. 167, p. 326~p. 331
- (36) 前掲書 p. 415
- (37) 前掲書 p. 330~p. 331
- (38) 学校・学級を道場として位置づける実践の例としては、野瀬寛頭を中心とする成蹊学園の実践があげられる。(野瀬寛頭『小学教育論』同文館 昭和13年8月20日)また、軍隊をモデルとする学校・学級経営の実践の例としては、鈴木源輔を中心とする千葉県山武郡東金国民学校の実践があげられる。(鈴木源輔『戦時国民教育の実践』帝教書房 昭和17年5月)

(附記) 本稿は、昭和59年度文部省科学研究費補助金奨励研究(A)による研究成果の一部である。